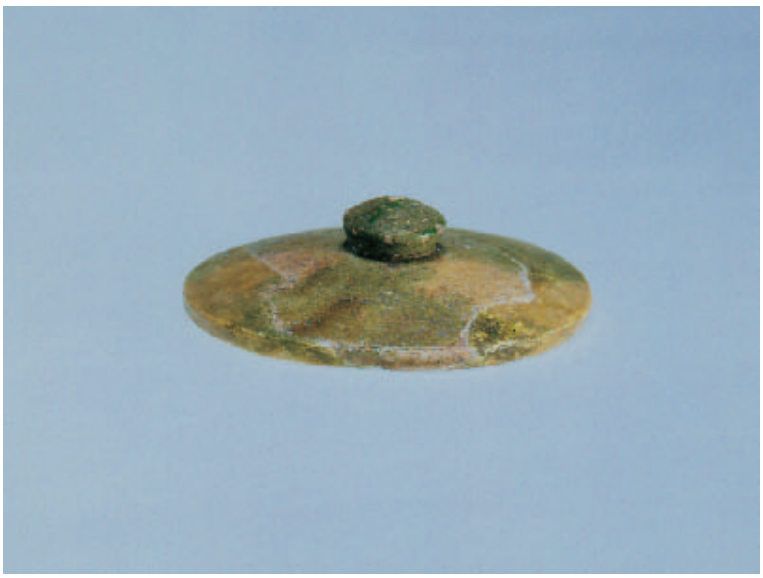
56　中道遺跡出土遺物



指　定　　市有形文化財　　昭和62年10月20日
所有者　　佐　久　市

中道遺跡は、千曲川西岸に広がる野沢平が片貝川に向かって下る微高地の西端部、泉団地の東方に位置し、昭和46年（1971）圃場整備事業に伴い発掘調査がされた。

その結果、古墳・奈良・平安時代の住居址をそれぞれ２軒ずつ確認するとともに、佐久地方では初めての出土となる奈良三彩小壷蓋・和同開珎（708年鋳造）をはじめ多くの遺物が出土した。

奈良三彩は、奈良時代に平城宮や寺院内での祭事や仏事に使用するため特別に焼かれた陶器である。出土した三彩小壷蓋は、最大径1.4cmの宝珠つまみを中央に有する径5.4cmの大きさで、外面は頂部が最も濃い緑釉と、緑釉の後に施された褐色と白釉の３色で、内面は淡緑黄釉が施されたものである。

和同開珎は、奈良から平安時代にかけて国が鋳造した皇朝十二銭（12種類の銅銭）の内最も古い発行通貨であるが、当時は銭の流通が畿内周辺部にとどまり、国は「蓄銭叙位令」（711年）などの法律を出しその流通に苦心した。

これらの史実より、東国の小さい一遺跡から奈良三彩と和同開珎がそろって出土したことはたいへん貴重な事例である。

奈良三彩小壷蓋　　１点　　和同開珎　　１点